

破 壊 (仮)

textband

1

観光地であることを除けば、自分の生まれ育った故郷とそれほど変わらぬ町を、私は宿へ向けて歩いていた。もう随分と歩いているように思うが、それらしき案内や看板が見えてくることもない。通りがかる人の一人でもあれば道を尋ねようものだが、ここへ来るまでに誰かと擦れ違うこともなかった。山の斜面を迂回するようにして敷かれたその道は、舗装こそされていたものの、徒歩で歩くことは想定されていないようであった。時間にして、すでに二十分は歩いたのだろうか。引き返してタクシーをつかまえるか、このまま進むか、判断しようにも現在地がどの辺りであるのか確認ができないため、決断しかねている。希望的観測から、じきに見えてくるころだとは思うのだが……。

左手は山の斜面、右手は雑木林。取り分けて変化のない道程で、私は初めてその足を止め、ひとつの物体と向かいあっていた。物体の色は白く、形は四角であった。表面はなめらかで、艶のある光沢を持ったそれは豆腐だった。豆腐——。本当にこれは豆腐だろうか。私はその物体を見たときに、反射的に豆腐だと思った。豆腐以外でこれに似たものを見たことがなかったからだ。スーパーで豆腐を買う場合、そのパッケージには「豆腐」と書かれているし、豆腐屋で買うにしても、豆腐屋に来ている時点で、そこにある白くて四角い物が豆腐であることを疑う余地はない。しかし、どうしたことだろう。山道にあるこの物体が、豆腐であるかどうか、私は答えを持ち合わせてなどいなかった。

2

「なに見てんだよ」

その豆腐らしき白い物体が、ぶっきらぼうに言った、ような気がした。しかし、冷静に考えて、そんなことは有り得ない。あれが豆腐だろうと、豆腐以外のなにかだろうと、しゃべる訳がない。幻覚でも見ているのだろうか。自分で思ってるより、疲れがたまっているのかも知れないな。早く宿に行って、休もう。

私は、いま見ているもののことは忘れ、宿に向かって歩き出した。大学を出てもう5年、最近はずっかり見て見ぬふりがうまくなった。あの頃忌み嫌っていた大人に、まさにいま自分になっているという事実。それすらも、見ずに暮らせるようになっていた。

それからさらに10分ほど歩いて、ようやく宿に着いた。なんでも、ここは室町時代から続く、由緒正しい旅館らしい。当時のまま残っている訳ではないが、ところどころに歴史を感じさせるオブジェが配されていて、その気の利かせ方に、少しだけイラッとした。なかでも、天井を支えている梁は、幾多の戦乱を乗り越えずと残っているそうで、国の重要文化財にも登録されているとか。また、そのしぶとく残るさまのパッケージングに成功してからは、客足の絶えない人気

旅館になっている——そう聞いていたのだが、私以外の客は見当たらない。いや、客以外に、そもそも、旅館の従業員がいない。まだ「いらっしゃいませ」って言われていないじゃないか。思い返してみると、この町に来てから、誰とも会ってないぞ。ただひとつを、除いては。

3

その由緒正しい人気旅館には従業員・客ともに誰もいない。理由はさておき、とにかくその事実を確認した私は、ここでの宿泊を断念し、他の宿を当てることにした。事前の調べでは、この先にも別の宿があったはず。

解せない事実が続いている。

山道に落ちていた豆腐ではないかもしれない豆腐らしき謎の物体、「人気」のない人気旅館...

“答えが無いのも答えのひとつ”——2年前に亡くなった祖母の口癖である。それがネイティブアメリカンの諺だったというのは、つい最近知ったこと。不思議な現象、理解しがたい事象に直面した際にはたいていこの言葉を思い浮かべ、片付けてしまう。考えても無駄なことは考えないようにして、やらねばならないことだけをやる.....これではよくないと薄々気づいていながら、そこに目をつぶって駆け足の日々を送っている...またそんなことを考えながら、もう一つの宿に向かって歩いている。

ん？何か違う。何かが違う...後ろ髪を引かれる思いというのはこういうことだ。まだある。まだあるはずだ。豆腐——

私はあの豆腐から逃げてはいけないという強い衝動にかられ、踵を返した。もう一度あの物体と向き合わなければ、このままずっと「じぶん」から逃げ続けてしまうような気がするんだ。

4

白い物体は先程見たのと同じ場所に、同じ姿のまま存在していた。夏だというのに蝉の声一つしないこの山と、人のいなくなった町を象徴するかのように辺りはしんと静まり返っており、まるでそこだけ時間が止まっているかのようであった。

私は白い物体の前にあぐらをかいて座り、正面からそれを見つめてみた。白く、四角い、物体。手を伸ばしてそれに触れようとした刹那、昔見たスタンリー・キューブリックの映画を思い出した。その映画にはモノリスという黒い板状の物体が登場した。四角柱の各辺が1：4：9という最初の3つの整数の二乗で構成されたその物体は、映画の中で太古の猿を知的生命体へと進化させていた。まさかこの物体が私を次世代の生命体に進化させるということはないだろうが、しかしこの無表情で無機質な物体が私に何かしら超常的なものを感じさせているのもまた事実であった。

それでも私はこの物体と向き合わなければならない。それはある種の天啓として熱を持ち、いまや私の中に明確に存在していた。答えが無いのも答えのひとつなのだと祖母は言った。それが真理なのだとしても、私は私自身の意思をナイフのように研ぎ澄まし、その先端を何かに向けて突き刺すことを必要としていた。それはあるいは"やらねばならないこと"を状況に対応して受動的に消化してきただけだった私が次世代の私へ進化するための通過儀礼としてのモノリス的行為と言えるかもしれなかった。私は強い意思と熱意を持って何かに向かいあわなければならないのだ。そしてこの機会を逃してしまったら、後にも先にももう二度と私は変わることはできないであろう。

5

なだらかな風が木々の葉をゆらしていた。

白い物体の前に座り込んでから、私は先人達の「食」への探求心に畏敬の念を感じると同時に、あきれてもいた。というのも、これが豆腐であるかどうかなど、食べてみるのが最も簡単でスムーズな方法だと思ったのだが、これが豆腐ではなかった場合の可能性に気を取られ、恐怖を感じてしまっていたからだ。先人達は魚介の物や動物など、あらゆるものを食しては、今日の私たちに知恵と情報を残してきた。命を落とした者もあったであろう。そもそも、食物となる生物はいつでも命を落とし、その命をこちらへ捧げている。それがどうだ。先ほどの人気旅館が文化財の価値を理解もせずにキーホルダーや和菓子のモチーフにして土産品を販売しているように、人気のランチやグルメ情報が雑誌やテレビから大量に流され続けている。

「くそっ！貴様らは豚や魚の気持ちになったことがあるのか！」

顔を真っ赤にして大声でそう叫びながら、言い終える少し前に私は冷静な気持ちになっていた。私自身、じつはそれほど豚や魚の気持ちを考えたことなどなかったからだ。

「深淵をのぞくとき、深淵もまたこちらをのぞいている」

これは、祖母ではなくニーチェの言葉。私は白い物体のことを考えすぎるあまり、豚や魚の意識に取り込まれるところであった。気をつけねばなるまい。

—この白い物体、まさか、このように人間の意識を狂わせることを目的として作られたバイオ兵器……。2年前に変死した祖母の死因とも何か関係があるのかもしれない。私はその白い物体を、バスでの長旅になったときのためにバッグに忍ばせていたエチケット袋へ入れ、もうひとつの宿へと向かうことにした。

そのとき初めて私は、この町のある大きな異変に気づき、恐怖にその身を震わせた。

6

ここは、もう20年以上も前になるであろう、まだ幼かった私が住んでいた"特区"だ。それも、当時のままの。原因も経緯も分からないままだが、現状は把握した。そして、これこそが祖母が最期に私に伝えてくれた「伝説」であることを、直感的に、私は理解した。相変わらず身の震えは止まらなかったが、伝説のとおりだとすれば、まだ可能性はある。

パーン！

私は、私の右手で、私の右頬を力一杯平手打ちした。いつか見たテレビタレントがやっていたそれを、私はここぞという時に真似している。そうして気合を入れ直した私は、バッグの中からエチケット袋を取り出した。今なら、分かる。この豆腐のような白い物体の正体も、出会った理由（ワケ）も、そして、今まさに訪れる、危機も。

バッグからエチケット袋を取り出した私の周囲を、無数の黒く四角い物体が取り囲んでいた。

7

うおあぁっ、と思わず声を漏らす。数秒間首をすくめて警戒する。少なくともこちらが何もしなければ、私に害はないと判断した。深く息をする。若干紅潮した右の頬をさすりつつ。

目を背けずに、無数の黒く四角い物体それぞれをよく観察してみることにする。完全な黒ではないな、半透明かな。ぷるぷるとしてやわらかそうだ。濡れたような光沢。何だかひんやりしていそうだな。——まるでコンニャクじゃないか。なんだ、コンニャクか——私はコンニャクに囲まれている。コンニャクが私を囲んでいる。もちろんこれらが正真正銘のコンニャクである確証はないのであるが、その仮説で進めることにした。不可知な事象を既知の何かに落とし込む手法でひとときの安心を手に入れた私は、例のもう一つの宿に向かおうと...いやそういうことではない。なぜ私が「豆腐」の入ったエチケット袋を取り出すと、このように宙をプカプカと浮くコンニャクのようなものが出現し、自分を包囲するのか。これはコンニャク状の浮遊モノリスなのだろうか。

両親が共働きであった為、いわゆるおばあちゃん子として育てられた私は、よく祖母から不思議な話を聞かされていた。「鉛の鳥」の話。「人体自然発火」の話。「モンクロチョウ」の話など...神秘主義に造詣の深い彼女の話は、幼かった私を興奮させた。特に印象に残っているのは「アイデア界」の話。アイデア論は言うまでもなくプラトンの説いた世界観であるが、祖母の話はそれを敷衍したものだった。「アイデア崩れし時 現世揺らぎ 水は低きから高きに流る」というフレーズは今も心に刻まれている。この現実世界で巻き起こる非科学的な事象は、アイデア界の崩壊に起因する、という趣旨だった。

いつの間にか陽は傾き、頬の赤みはいよいよ目立たなくなってきた。

コンニャク達は宙に浮かび、私を取り囲んだまま監視するようにゆっくりと周囲を旋回していた。こちらから動かない限り害が無いのはありがたかったが、先程から一歩も動けないまま一時間程経過している。いつまでもこの膠着状態を続けているわけにはいかなかった。私の精神は限界に近づいていたし、足もいささか痺れてきていたが、なによりも現実的な問題が私を苦しめていた。先程から猛烈な空腹感に襲われているのだ。

彼らはコンニャクだからあるいは食料を摂取しないで一日中飛び回っていても平気なのかも知れないが、あいにく私はコンニャクでも豆腐でもない、れっきとした霊長類ヒト科の人間なのだ。酒のつまみや味噌汁の具材のような単純な構造で私の体はできてはいないのだ。私が朝から何も食べていないのを知った上で彼らが私を包囲して餓死するのを待っているとは思えなかったが、この状況を打破しなければ最悪の想像が現実のものとなりかねなかった。

極度の空腹から来る怒りが私の体の隅々を駆け巡っていた。なんだというのだろうか？なぜ私だけがこんな目に合わなくてはいけないのだろうか？旅館の従業員達はどこへいったのだろうか？町の人間はどこへいったのだろうか？なぜ私は――

突然目の奥がじんじんと熱を帯びはじめたかと思うと、眼球が震えだし、目の前に浮かぶコンニャク達の姿が滲んでいった。我慢も限界だった。

そして次の瞬間、頭の内側で、ばん、という大きな音が鳴り、何かが私の中で弾けた感覚があった。

「もう沢山だ！私は腹が減った！！」

私は仁王立ちし、コンニャク達を睨みつけながらエチケット袋を掲げ上げた。そして袋の中に右手を突き入れ、白い物体を鷲掴みにすると一気に口の中に放り込んだ。

豆腐のぬらぬらとした食感と同時に、舌の上に大豆独特の苦味とほんのりとした甘みが口いっぱいに広がっていき、鼻腔を抜けていった。私は無心で豆腐を掴み出すと、次々と口の中に放り込んでいった――

空になった袋を無造作に丸めながら、一時の空腹を凌ぐことができた私は、あらかじめこの結果を予測していたことに気づいた。異なる結果を思い描きはしたが、想定外の事実が起こらなかったことに対するある種の安堵を感じながら、私は豆腐の味を反芻していた。

人間は、起こる可能性の低い出来事を奇跡とし、それを願う。ときにそれは「夢」や「希望」と呼ばれ、まるで映画のようなドラマチックな物語に胸を熱くしたりもする。その一方で、それが自分の世界では起こりえない物語であることも、最初からちゃんと分かっている。

豆腐のようなものは、やはり豆腐であり、確証がないだけで変死とされていた祖母の死も、やはりただの自殺にすぎなかったのだ——。夢中になって聞いた「イデア界」の話は、祖母の死と同時に、どこにでもある退屈な作り話へと変わった。都合よく解釈するための想像力を、私はもう必要としていない。事実だけを見つめていきたいのだ。

どこまでも自由に、永遠に続く想像の世界よりも、必ず終わる世界の日常を生きることを、私たちは望んでいる。

先ほどまで感じていた恐怖は、腹が満たされればすぐに姿を消した。人間の想像力など、たかがそんなものだ。恐怖とは感情であり、現象ではない。肉体的な現象だけが蓄積されていき、その蓄積で形成されているのがこの「世界」だ。私はそれを知っている。私は現実を理解している。

——ただひとつ、この無数のコンニャクを除いては！

私のすぐ目の前、もっとも近くに浮かんでいたコンニャクだけが、ブルブルと振動していた。やがてファスナーが開くようにゆっくりと中央が裂けてゆき、中から棒状の固体が出てくると、中空に向かって伸びをするように白濁した液体がドロリと流れ出した。それは、発情するオス犬が興奮して射精をしたかのようであった。そして今度は、人間の右手のようなものが生えてきて、すぐ近くに浮遊している別のコンニャクをつかみ取り、食った。

それはちょうど私が豆腐を手づかみで食べた動作そのものでもあった。

無数のコンニャクは、たちどころに"食うもの"と"食われるもの"となり、互いを食い合った。私はその光景を、少しだけ美しいと感じていた。

10

コンニャクにもどうやら「意志」や「個性」があるようだった。逃げ惑う小さなコンニャクを、じわじわ追い詰めていくコンニャク。背後（ただの四角いそののどこが前なのかも定かではないのだが）からそっと忍び寄り、一瞬の隙を突いて捕食するコンニャク。たくさんの部下を使ってじわじわいたぶるコンニャク部長。いたぶられているOLコンニャクをサッと救い出し、コンニャク部長を細かく刻むコンニャク侍。蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う部下コンニャク。その後すぐに、恋に落ちたかのように寄り添う、コンニャク侍とOLコンニャク。

それはまるで人間社会の縮図で、はじめこそ美しいと感じたものの、すっかり恐ろしくなって、気付けば涙目になっていた。

「まったく、あんたはいつまで経っても子供のままだねえ」

私は、耳を疑った。さっきの豆腐の聲が、またしたのだ。そして、それと同時に、記憶をも、

疑ってかかることになった。なぜなら、豆腐の声は、豆腐の声ではなく、祖母の声だったのだ。

「まったく、わしが生きてる頃はあるなおばあちゃんおばあちゃん言ってたのに、全部忘れちゃったのかい？」

よみがえる、祖母と過ごした日々。そして聞かされてきた数々の不思議な話たちのこと。たまっていた涙が、あふれてきそうなぎりぎりのタイミングで。

「やっとぜんぶ思い出したようじゃな。これでわしも安心して逝ける。面倒かけてすまんが、頼んだぞ…」

祖母は今度こそ、あっさりと逝った。今日この日までずっと見守ってくれた、祖母。おばあちゃん、ありがとう。私は己の不甲斐なさを少しの間情けなく感じた。しかし、そんなことをずっと考えていることこそ、祖母への申し訳が立たないと知っていたので、それは2秒でやめた。涙は、流さなかった。

そして、全神経を、この状況を如何に切り抜けるかだけに集中させた。

集中させた末に分かったのは、いまの状況は祖母に聞かされた「モンクロチョウ」の話とほぼ同じなので、その主人公と同じ行動を取ればいい、ということ。ひとつ、問題があるとすれば、無数のコンニャクたちがいつの間にか、一体の、5階建てのビルくらいの大きさになっていたこと。祖母の話では、手のひらサイズだったのに。

11

コンニャクが5階建てのビルくらいの大きさになったのではなく、私の体が小さくなったということに気づくのに、それ程、時間はかからなかった。コンニャクはおろか、周囲の物体全てが巨大化しているではないか。

「モンクロチョウ」の話は主人公のモンクロチョウ（モンクロチョウ—紋黒鳥—は、モンクロチョウ目・モンクロチョウ科に分類される半鳥半蝶の生物。幼虫期の20年間あまりを地中で暮らす。幼虫期の外観はミミズに酷似している。その歳月を越えられないものが99.99%を超える為、成虫は希少。最大の天敵として、モグラが挙げられる。）が蛹から孵り、いよいよその翼を広げる段になって初めて「自分が飛べる種族ではない」と悟り再び蛹の中に戻るという話であつたはず。

冷静になるとモンクロチョウの話といまの状況は似ているとは言えない。各事象を高次へ抽象すれば、ほぼ同じ話であると言えなくもないが…

ん？5階建てのビル？…いまの状況は「モンクロチョウ」の話ではなくむしろ、「師匠：サイコフスキー」の話に近い。

「師匠：サイコフスキー」の話は、いわゆるバトル漫画の走りであって、祖母の話の中でも屈指のポップさと良い意味の低俗さをたたえていた。主人公のジョン山村は、5階建てのビル最上階に捕らわれた師匠：サイコフスキーを救うべく、各階の超能力者と超能力バトルを繰り広げるというもの。言うまでもないことだが、最上階の“ラスボス”はもちろんサイコフスキーで、最終的には、同志討ち、なぜか地球が大爆発するというカタルシスで終幕する…

地球にはまだ爆発してほしくないと思った私は、このことを考えるのをやめた。

12

私は、この町に来てからいくつもの不可思議な現象を目の当たりにした。とつぜん現れた豆腐、誰もいない町、浮遊するコンニャク、そして、縮んでいく体。それらの現象を既存の物語や理論を当てはめることで私は物事を相対化しようと務めた。それが理不尽な世界から私という人間が理解可能な"現実"を守る唯一の方法だと思ったからだ。ネイティブアメリカンの諺、モノリス、ニーチェ、イデア界、モンクロチョウ、サイコフスキー、それらの物語によって一時的にせよ不可思議な現象に説明をつけることでメタフォリカルな状況を解体し、現実に戻着できたかのように思えた。しかしその都度、私の努力をあざ笑うかのように新たに不可思議な事象が起こり、私の創りだした"現実"という名の物語はこどごとく破綻していったのだった。

そして今、私の体はこうしている間にも加速度的に萎んでいた。気がつけば先程まで足首の高さで揺れていたはずの雑草は、今や私の腹部の辺りまで迫ってきている。起こっている事象もそれらの因果関係もまったく理解できないまま、数分後には私は塵のようなサイズになっているだろうと思われた。

—私は消え去りつつあるのだ。

その結論を前に、私の心は不思議と落ち着いていた。目の前にそびえ立つコンニャクは今や高層ビルのような巨大さになり、私を見下ろしている。

雑草は、私の胸元まで迫っていた。

最終話について

今作では、本編はリレー形式でメンバーが順番に物語を紡ぎ、最終話のみメンバーそれぞれが執筆するという形式をとっています。つまり、結末が4種類あるということです。

メンバーそれぞれの描く結末を、お楽しみください。

最終話 A

これは運命か。それとも使命か。吸い寄せられるように、私は5階建てのビルへ向けて走り出した。

目に映る景色は徐々に奇天烈なものへと変わって行き、形や大きさの概念が無視された空間のなかを、私の意識だけが移動しているような感覚であった。水中を泳ぐ魚、空を飛ぶ鳥。あるいはそれよりも、転送されるファクシミリのデータ、光ファイバーのなかの出来事に近いのであろうと思われた。

—私は何を考え

—何処へ向かい

—何をするつもりなのか

私はすでに肉体を失っており、どこまでが私なのか分からなくなっていた。

死ね死にたいマジウケる愛してるウザい死ね死にたいマジウケる愛してるウザい死ね死にたいマジウケる愛してるウザい死ね死にたいマジウケる愛してるウザい死ね死にたい死ねウザい死ねウザい死んじまえ死ね死にたい

誰のものか分からない言葉がまるで呪いのように、母を探す赤子のように、私に入りこんでくる。それとも私の中から湧いてくるのか。宿に宿泊したあと、私は自分が死のうとしていたことを、ついに思い出してしまった。

私はもう、どうでもよくなっていた。このまま流されるままに消えてしまえるなら、それもいいだろう。仮に元の世界に戻ったとしてそこに何がある。何が……。

私は祖母が話してくれた「水槽の脳」の話を思い出していた。この世界は本当は存在しておらず、ただ水槽に入れられた脳が電極による刺激を受けて、錯覚を見ているのだと。

そうなのかもしれない。今の私がまさにその状態にある。唯一、肉体的な感覚をもって思い出せるのは、先ほど手づかみで食べた豆腐の味覚だけだ。ただし、これも電極による刺激である可能性が高い。豆腐。豆腐。豆腐。豆腐。なぜこんなに豆腐のことばかり考えてしまうのか。「水槽の脳」だとしたら、何の意思がこんなに豆腐の信号を送ってくるのだろう。

鮮明な豆腐の味覚とは反対に、私の意識は遠ざかっていく。それは、眠りに落ちるような心地よさであった。

——朝の光。食卓に並べられた朝食の匂い。生活の音。そして、白くて四角い豆腐。祖母がいつも食べていた豆腐。私は苦手だった。私が食べずに残した豆腐を、祖母はいつも何も言わずに片づけた。

あの豆腐を、祖母はいつもどうしていたのだろう。捨てていたのだろうか。今となっては確認する術がない。

こうして豆腐のことを考えている間だけ、私は私を認識してられる。祖母の言葉と、たくさんの物語と、別れの悲しみを思い出せる。「水槽の脳」でも構わない。そのほうが私には都合がよい。

ここには言葉しかないのだ。

ここでは、宇宙も、素粒子も、すべてが言葉で出来ている。過去も未来も、言葉で書き換えることができる。言葉で世界を変えることができる。

あのときあそこに置かれていた豆腐も、きっと誰かの言葉だった。

私はいつでもあの豆腐を思い出そう。ここが「水槽の脳」で、ここから外に出たいと思ったのなら、それは簡単なことだ。

自分ではない誰かに、言葉を渡す方法を考えればいい。

加速度的に、体は縮小していった。最後の方は、もうほとんど覚えていなかった。私が消え去る瞬間、ほほえむ祖母の顔が見えた気がした、そのことだけは、ひっかかっていた。

あのとき、私になにが起こったのか。消え去ったはずの私が、なぜここにいるのか。

...「ここ」？「ここ」とは、一体なにをさしているのだろう。「ここ」は、「ここ」のことなのか？周囲を見渡しても、何も感じられない。壁に囲まれているようにも見えるが、果てなど何処にもないかのようでもある。視界に陰影はなかった。そもそも、今私は目を、開けているのか、閉じているのか。

また、「ここ」には重力もないように思える。平衡感覚が失われたようだ。あるいは、平衡感覚だけの生き物になってしまったのかも知れない。色彩を失った「ここ」で、私の感受性もまた、輝きを失ってしまったのか。

ひとつ、素朴な疑問がよぎる。初めて訪れた（というより、体感した、という表現が適切かも知れない）「ここ」を、私はなぜ「ここ」だと認識できたのだろう。過去に私は、「ここ」に来たことがあったのだろうか。記憶を手繰ろうとした刹那、私の体が、不意に大きく揺れた。

何度かの衝撃が続いて、その後に、私は光を感じた。「ここ」が裂けていた。裂け目の向こうにあるのは、私がコンニャクたちに囲まれていたあの場所だった。何かに導かれるように「ここ」から裂け目の外へと私は飛び出した。あるいはそれは、「ここ」の意志だったのかも知れない。

元の場所に戻った私は、周囲を注意深く見渡した。そこにはもう、コンニャクたちはいなかった。雑草は、いつもと同じ高さにあった。縮んだ体も元に戻っている。今日、この街で体験したことは、すべて夢だったのだろう。

夢であってほしいと願った私は、足元に転がるエチケット袋と、その周囲に散らばる細かな固形物のことは無視した。

よし、今度こそ旅館に行って、露天風呂にでもつかってのんびりしよう。気を取り直した私の視界に、タイミングよくタクシーが現れた。「山頂の旅館まで」と告げると、運転手は、ひとこと「ウェーイ」と言った。ほどなくして、旅館に着いた。運転手に礼を言い、「ウェーイ」という言葉を添えて、運賃を支払った。釣りはいいから、という私の言葉に、運転手は小さな声で、でもどこかうれしそうに「ウェーイ」とつぶやいた。ウェーイ。

旅館では、感じのよさそうな女将が出迎えてくれた。「お兄さん、疲れたでしょう？今日はゆっくり休んでくださいね」と、上目遣いに言う。こういう、自然に上目遣いのできるような、女で

あるという武器を無意識のうちに使いこなせるタイプの人間は、あまり好みではない。だいたい、こういうタイプが出世するんだよな。

「お兄さん、先にお風呂に入ってらっしゃってはとうですか？私どもは、その間にお食事をご用意させていただきますので。」私は、その提案に素直に乗った。断る理由などなにもない。露天風呂で疲れを癒し、新鮮な山の幸に舌鼓を打ち、そして眠る。シンプルでいいのだ。今日の出来事、いや、夢は、シンプルでなかった。だからこそ、一日をシンプルに終了させなければならない。

シンプルに服を脱ぎ、シンプルな所作で汗を流し、ときに大胆に風呂に入った。日々の暮らしにおいて少しずつ私の中に堆積していったものごとは、お湯を通じて、シンプルの中へと融けていった。

シンプルに、それでいて丁寧に体を拭き、シンプルな浴衣を着た私は、部屋へと向かった。部屋の前には女将がいた。「たった今お食事のご用意ができました。当館自慢の料理の数々を、心ゆくまでご堪能くださいませ。」

私は女将の言葉に胸を躍らせ、扉を開けた。そして沈黙した。テーブルに並ぶのは、無数の細かなコンニャクたちだった。なんてシンプルなんだろう。

呆然と立ち尽くす私に、女将は言った。「なにも終わってませんよ、まだ。」

ウェーイ。

加速度的にサイズダウンする私。風が吹けば飛んでしまう身長1ミリメートルの私に一体何ができるのか。私は、考えることを放棄しようとしていた。

———何度も言うようだが私は祖母に育てられた。その祖母から、科学とは真逆の超常的な話ばかりを聞かされた私は、その反動なのか、物事の客観的真理に興味を持ち始めるようになっていた。「物質とは何であるか？物体はなにでできているか？どうなっているのか？」ということ を明らかにしたいという強い思いから、大学では物性物理学を専攻した。科学は私に祖母の話と同等かそれ以上の衝撃を与えてくれた。私の希望としては、大学院へ進み、そのままアカデミックな立場で研究を続けていきたくかった。しかしながら、それ程裕福ではない家庭の経済的事情により、就職を余儀なくされるのであった。

久々に長期休暇を取ることができた私は、この一人旅で存分にくつろごうじゃないか...と思っていたところでの「豆腐」。「豆腐」からの怪奇現象。「豆腐」からはじまる超自然法則的現象...祖母の話のような世界に埋没しているではないか...

私のサイズはマイクロレベルからナノレベルになりつつある。1マイクロメートルは1ミリメートルの1000分の1。ちなみに人間の細胞1個が10マイクロメートル前後だと言われている。そして1ナノメートルは1マイクロメートルの1000分の1。インフルエンザウィルスの直径が100ナノメートルとされている。

私はもはや、光の波長よりも小さい為、可視光の世界では語られない。つまり人の目には見えない。人の目に見えないのなら、いてもいなくても同じ。社会的には死んでしまったのだ。物性論を志した人間の体長そのものが、その微視的レベルにまで縮小してしまったというのは皮肉なことである。いよいよ物質を構成する最小の単位、素粒子に達する。

見えた。私はそこに「真理」を見出した！！

神経細胞・シナプスのサイズをゆうに通り越しており、もはや言語で以て思考をすることは困難。究極的な縮小により思考を破壊された私の言語は完全に「文字化け」していた。

真・I痺cワ&・怜

G・篁控!紫恚荔激≥モゅ噫・・/ten・樞#渦mヤ・ワ痺樞#渦Iヤcリメ・・・鞘"・I痺渦h痺・膚罔・/tenc∞譚・4祉∴モや!・J銀!・¥痺冷!溪!・/Sentλ・・・I痺cワ&・・・箆鞘"凧!c>・句#・・・遺"]∞譚・4祉∴モや!・J銀!・¥痺冷!>根・・香・・!c☆・銀"牙!岩!渦・・坂"銀!凧!・∴メや"岩!障○・・/Sentence>・・>・c<>痰・・・!cモ翫ク實ЫI・・翫^・≤メc@・・/リメ

リメtence> 織・翼モゆ實ЫИ・・≠・・!・≠・・≥・呐刼・c☆ 若hヤ・ワメヤ"岩!
障○・・・/Sentence> ・・・c<≦メ凧"よJ倪!・!c☆・遺!KK∞・補"俄!・♀縊冷!・jヤ溪"潟
⊕・綽・≦ワリメリメ 羝俱ヨ五/Word> 莖・漠・帥c痺恰ユ紂嘩/Word> 縊・@宴kモヤヨ 篋壻
C丈ユ紂嘩 怜 續医・膩・/Word> 荅翫R九d> 羶?紕我)・散・初≡樞理

(*著者の意向により、故意に「文字化け」を演出しております。読者各位のご賢察をお願い申し上げます。)

私はゆっくりと、しかし確実に消滅へと向かっていた。

巨大化していく風景に囲まれながら、頭の中では緩慢な走馬燈とでも言うべき記憶の総括が進行していた。私はこの町に来てから起こった理不尽で脈絡の無い出来事を思い返し、改めて一貫性が見えない一連の流れに呆れかえっていた。まるで小説家気取りの素人が行き当たりばったりで書いた物語のようだ、と私は思った。道ばたに豆腐が置いてあったりコンニャクが空を飛んだり荒唐無稽で支離滅裂なこの事態は、誰かが後先など考えずに思いつくまま描いた出来の悪い物語のようだ。いや、豆腐とコンニャクだけではない。私も私で、空腹に襲われたからといって道ばたに落ちていた豆腐を食べるなど正常な人間のする行動だろうか？ 獣ではないのだから人間の矜持を持って、道ばたに落ちている豆腐など断固拒否すべきなのだ。まてよ、もしかすると私も誰かの書いた小説の一部なのかも……。恐怖を押し殺すための慰みとしてそのようなことを夢想していると、目の前に終わりが迫っているという不安感も不思議と紛らわせることができるのだった。

そうだ。突然豆腐から聞こえた祖母の声も、この町に人がいない理由も、私が縮んでいくのも、全て誰かが書き損じた物語なのだ——そこで私は奇妙なことに気がついた。そもそも何の用事があるって自分がこの町にやってきたのか、まったく思い出せないのだ。

—私は何故この町へやってきたのだ？

その答えは当然自分自身が知っているはずだったが、恐怖や焦りによるせいかどうしても思い出すことができなかった。落ち着いていると思っていたのだが、どうやら心の奥底ではやはり平常通りとはいかないようだ。

まったく...書き手がしっかりしないばかりにこのままでは一番肝心の主人公の動機すら解明できないまま物語が終わりを迎えることになるのだ。物語をこんな風に引っかき回しておいて収集させないなんて、ずいぶんとずさんな物書きだな。などとおどけながら私は考えた。

もちろん、私が存在しているこの世界が誰かの作った物語ではないことなどはわかっていた。この世界には私の知っている者も知らない者も存在しており、数え切れないほどの人間が私の知らないどこかで今も息をしているのだ。そしてあの豆腐も、コンニャクも、同じように私の知らないところで起きた何らかの事態によって生まれた存在だったというだけだ。私の人生が誰かが書いた物語なんかであるはずがない。そんなことはわかっていた。

大きなため息をひとつつくと、私は目の前の状況を今一度確認してみた。

コンニャクはすでに天までそびえ立つ壁となっていた。一面に広がる黒々とした空間はまるで刑

務所を囲んでいる壁のように私の視界全てを暗黒に染めていて、宇宙空間のようだった。落ちている石ころは段ボール大の巨大な岩石に成り果てどっしりとした重量感で存在していた。胸元で揺れていたはずの雑草は千年松のような巨大さでギシギシと音を立てながら揺れている。どうやら私のサイズはかなり小さくなってきているらしい。いよいよ終わりが近いようだった。

直面した事態にできうる限りの手段でもって挑んだつもりではあったが、どうやら何一つ解らないまま幕を閉じることになりそうだった。しかし空想のおかげか、最期の時を恐怖と混沌と敗北感の中で終わらせずに済んだことは幸運と言えるのかもしれない。

——物語を作るのであれば次はもっとうまくやってもらいたいものだな

最後にそんなことを考えて少し笑い、私は静かに目を閉じた。

1（フォンダ）

事前の話し合い一切なしで書くスタートだったので、主人公と豆腐だけを投げ込みました。とても無責任な出だしになったと自負しております。豆腐じゃなくても良かったけど、「え？何で？」という感じのもので他の3名を困惑させたかったのであります。

2（おしこまん）

改めて読み直して思ったのは、ぼくは第三者に語らせることで主人公を動かしているな、ということです。それが性格なのかなんなのか、分らないですけど。それと、風景などの描写がとても苦手で、すごく苦労した憶えがあります。たしか、この旅館云々は、Googleで画像検索をして出てきたヤツを見て、必死に書きました。書き直したい気持ちもありますが、これはこれで、ありだと言ひ聞かせています。とかいいつつ、実はこっそり加筆修正してます。

3（チーパー）

連想したあらゆる何かを散りばめて綴っていくしかないと分かりました。ちなみに、小説は今までに8冊くらいしか読んだことがありません。

4（かい）

「モノリス的行為」って言うてみたかったです。

5（フォンダ）

僕なりに3人の展開を全部拾ってやろうとした悪あがきが見えたり見えなかったり。おしこまんへの無茶なフリで楽しんでいる感が80パーセントを占めている。

6（おしこまん）

頬を平手打ちするというのは雨上がり決死隊の宮迫で、宮迫のマネをするのはぼくです。どうしても、じぶんの中のものが出ちゃいますね。ああ…。でも、出ちゃうっていうより、出さざるを得ない、のほうに近いかも。

7（チーパー）

話を進めるのが怖くなったので（じぶんの力ではまとめきれないので）、主人公に述懐させて逃げてしまいました。が、その述懐の内容が、じぶんに跳ね返ってくることになろうとは...

8（かい）

思い切って豆腐を食べさせてしまった。書いていた段階では、豆腐が主人公から何がしかの力を引き出しそれによってコンニャク軍団と戦うような流れを想像していました。すいません。

9（フォンダ）

たしか僕はここで、コンニャクが人間の「業」を吸収して進化していき、主人公に問題提起をしてくるような流れを想定して書いた...のだったかな？あと、作り話とはいえ、主人公をなんとかしてあげないといかんあ、と道徳心が芽生えてきた頃。

10（おしこまん）

コンニャクたちの描写は筆がノってますね。絵を想像してください。どんな風にやってもチーパーさんならどうにかしてくれる、というぼくの中での一方的な信頼感が芽生えつつあったので、だんだん自由になっていっています。

11（チーパー）

まさかの「モンクロチョウ」のパスに打ち震えました。こうなったら、どこまでも作り話を作り続けようと思えるようになっていました。

12（かい）

最終回手前なのでとりあえず物語を一旦総括してみました。いくらググっても「師匠：サイコフスキー」なる作品が出てこないのも不思議だったのだが、あとでcheapeerさんに聞いたところによるとそんな作品はこの世に存在していないいらしかった。わお！

最終話 A（フォンダ）

まずこれは絶対に言うておかないといけないのだけど、僕だけ締め切りを2時間ほど遅れたんですね。僕が締め切り決めたのに...。本当にすみませんでした！

書いてるうちに芽生えた道徳心のせいで、主人公と祖母の関係とか、そこにあった生活、それを明らかにしたうえで前に行かねば！みたいな思いが強くなっていて、でも考えれば考えるほど絶望的な気持ちになって書いたのを覚えておるです。で、なんとか書き終えてそのまま力尽きて熟睡してしまったと。

読み返すとノイローゼみたいな内容になってんな！

ちょうど「この世界は9次元まである」みたいな東大の講義を聴いたあとだったので、錯綜してい

ます。

人間の言葉とか思考って、物質でもないし、なんなんでしょうね。

最終話 B（おしこまん）

それぞれが最後を書くというのは、すごくよいアイデアだったと思います。バンドメンバーの個性がこれでもかというくらいあふれ出ています。

ぼくのこれは、「シンプル」っていう単語を、思い付いてしまったんです。最初は全然うまく文章をつづれなかったんですけど、「シンプル」以降のタイピングの滑らかさといったら！

最終話 C（チーパー）

矛盾の沼に沈降してますね。

最終話 D（かい）

むりやり物語を完結させようとしたら色々と苦しいものになってしまった。長い文章を書く時はもっと整理してから書かないといけないなと痛感した。

こんな風に物語？を真剣に自分の頭で考えて書くような経験は初めてのことだったので、先がまったく思いつかずに悩むことや、書き終わってから後悔することもあったのだけれど、僕個人の体験として言えばそれらも含めてとても刺激的で楽しいものでありました。